

2022年11月18日(金)19:00開演

19日(土)14:00開演 プレトーク 13:20~

**世界的オーボエ奏者であり指揮者でもある
フランソワ・ルルーとともに追究する、
理想のアンサンブル**

指揮・オーボエ：**フランソワ・ルルー**ドヴォルジャーク：
管楽セレナーデ 二短調 op.44 B.77*ドヴォルジャーク：
《伝説》op.59 B.122より第1番、第8番、第3番

モーツァルト：オーボエ協奏曲 八長調 K.314*

ビゼー：交響曲第1番 八長調

*は吹き振り
当初発表の内容から変更になりました

©ThomasKost

1回券料金 S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C 完売 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー！

聞き手 八木 宏之

— 今回のプログラムにはドヴォルジャーク、モーツァルト、ビゼーの作品が並んでいますが、選曲のコンセプトを教えてください。

まず、フランスの音楽家として、日本フィルと初めて共演するにあたり、フランスの作曲家の優れた作品を演奏したいと思いました。ビゼーの交響曲はフランス音楽の傑作であり、こうした作品を日本のオーケストラ、聴衆と分かち合うことは私にとって重要なことなのです。

ドヴォルジャークの《伝説》は演奏機会こそ少ないですが、本当に美しい作品ですので、同様に隠れた傑作であるドヴォルジャークの管楽セレナーデとともに今回のプログラムに選びました。

モーツァルトのオーボエ協奏曲は皆が私に求める作品です。わたしはそうしたリクエストに喜んでお応えします。

— ドヴォルジャークの管楽セレナーデでは、オーボエ奏者としてアンサンブルに参加され、吹き振りを披露されます。

室内楽を共に演奏して、私がこれまで培ってきた経験やアイデアをオーケストラの

メンバーと共有したり、解釈について互いの意見を交換したりすることは、初共演で相手のことを知るうえでとても有益です。

ドヴォルジャークの管楽セレナーデはモーツァルトの《グラン・パルティータ》と似通ったところが多く、ドヴォルジャークは間違いなくモーツァルトからインスピレーションを得ています。この作品は木管楽器のための室内楽の傑作のひとつであり、日本フィルの皆さんと一緒に演奏できるのがとても楽しみです。

— 《伝説》はルルーさんからの提案だったと伺いました。

ドヴォルジャークが4手ピアノのために作曲し、その後オーケストレーションを施した《伝説》は滅多に演奏されませんが、本当に美しい作品です。トロンボーンやチューバを含まない今回のプログラムに適した編成だったこともあり、この機会にぜひ日本のお客さんにご紹介したいと思って選びました。今回は全10曲のうち1番、3番、8番を演奏します。

— ルルーさんはこれまでモーツァルトのオーボエ協奏曲を数えきれないほど演奏されてきたかと思いますが、ルルーさんにとってこの協奏曲はどんな作品なのでしょう？

モーツァルトの協奏曲を演奏するためには、万全のコンディションや、明快でバランスの取れた完璧なテクニックが必要であり、モーツァルトが求めるパーフェクトの先にある「自由」を見つけることこそが、この作品を演奏する何よりの喜びなのです。

妻（ヴァイオリニストのりさ・パティアシュヴィリ）には、どうしてそんなにモーツァルトばかり演奏できるのかとよく聞かれます（笑）ヴァイオリンにはベートーヴェン、ブラームス、シマノフスキ、ショスタコーヴィチなどたくさん協奏曲がありますからね。しかしモーツァルトの協奏曲には、演奏する度に新しい発見がありますし、今回も日本フィルとそうした体験ができるはずですよ。

— ビゼーの交響曲は、2019年にスコットランド室内管と録音もしているルルーさん得意のレパートリーですね。

ビゼーはこの交響曲を17歳のときに作曲しました。当時ビゼーはグノーに作曲を師事していたので、この交響曲にはグノーの交響曲の影響が強く感じられます。そしてグノーの交響曲よりもよく書けています（笑）まさに天才です。しかしビゼーはグノーのスタイルを模倣したことをあまり誇らしく思っていなかったため、この交響曲は長い間忘れ去られてしまいました。第2楽章の美しさは特筆すべきもので、極めてフランス的な抒情性を持っています。のちのフォーレやプーランクを思わせる音楽ですが、その起源はビゼーにあるのです。

— 日本フィルとは今回が初共演となりますが、日本のオーケストラにはどんな印象をお持ちですか？

日本のオーケストラは完璧な準備をしてリハーサルに臨む、真のプロフェッショナルです。私が初めて日本に来たのは1991年、もう30年以上も前のことですが、日本人の時間の正確さや真面目さに驚いたことをよく覚えています。日本とヨーロッパでは言葉の違いもあって、リハーサルでのコミュニケーションの取り方が異なりますが、日本の音楽家は30年前よりもはるかにオープンになっています。

そして日本のホールと聴衆も素晴らしい。今回私たちはサントリーホールで演奏しますが、ここは世界屈指のホールです。才能あふれるプロフェッショナルな音楽家たちと、美しいホールで、熱心なお客さんを前に演奏できることを心より楽しみにしています。